

# みもすそ

伊勢神宮崇敬会だより

特集  
神宮研修所



お伊勢さんの歳時記

10月1日 神御衣奉織始祭

御酒殿祭

神宮観月会

5日 御塩殿祭

13日 神御衣奉織鎮謝祭

14日 神御衣祭

15日、25日 神嘗祭

31日 大祓

11月5日 倭姫宮秋の例大祭

23日、29日 新嘗祭

30日 大祓

12月1日 御酒殿祭

15日、25日 月次祭

28日 大麻暦奉製終了祭

31日 大祓

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御装を濯がれたことから「御装濯川」(みもすがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、みもすそを目指して五十鈴川畔を駆ける学生。



この日の古典講読は和歌。神宮観月会に向けてそれぞれが歌を詠んだ。

祭式、雅楽、居合、書道、古典…神宮の職員が指導



神宮楽師による雅楽の授業は口伝が基本。龍笛、筆簞、笙の3種類がある。



祭式の授業は神社本庁が定める「神社祭式」ののって行われる。



居合道の授業は敷地内の武道場で。



神職を志す若人が伊勢に寄宿し  
神宮の神職から直接学ぶ「神宮研修所」は  
来年、創立七十年を迎えます。  
祭式作法や雅楽など実践的な授業を通じて  
学生たちは神明奉仕の精神を養います。

# 特集 神宮研修所

先輩神職とともに五十鈴川で禊を行う学生。



禊の前後には、声を出しながら「天の鳥船」と呼ばれる所作で体をほぐし温める。

月初めの早朝、白装束に身を包んだ若者たちが威勢良く五十鈴川畔を駆けてきます。烏帽子岩近くの河原に着くと、白鉢巻きとふんどし一丁の姿になり、川の中へ。毎月恒例の禊に臨むのは、神宮研修所の学生たちです。

神宮研修所は、神宮が運営する神職の養成機関。神職を志す若者が伊勢の寮に二年間寄宿し、大御神様のご神徳を仰ぎながら神職として必要な基礎を身につけていきます。

神職になるには三つの方法があります。①國學院大學（東京都）の神道文化学科、または皇學館大学（三重県）の神道学科へ進学。②神職養成機関に入学。神社本庁が認定する養成機関は、神宮研修所ほか全国に七カ所。③通信教育。それぞれ階位や資格が異なります。

## 創立から七十年

神宮研修所は内宮近くの、桜が丘とよばれる閑静な丘陵地にあります。

神宮における神職養成の歴史は明治十五年（一八八二）にさかのぼります。時の神宮祭主久邇宮朝親親王の令達により、林崎文庫内に「皇學館」を創設。同年、東京でも「皇典講究所」が設立されました。前者は皇學館大学、後者は國學院大學の前身です。

明治三十六年には官立専門学校「神宮皇學館」となり、昭和十五年（一九四〇）に文部省所管の「神宮皇學館大學」へ昇格しました。ところが昭和二十一年にGHQが発した神道指令を受け、翌年三月に廃学となりました。

しかし、混迷する社会状況において神職の必要性が強く叫ばれるようになり、三重県神社庁から要請を受けた神宮は昭和二十七年四月、中堅神職の養成を目的とした「神宮神務実習生制度」を設置。三年後に再び「神宮皇學館」と改称します。東京の國學院大學と連携する指導方法がとられましたが、國學院大學の学制改革により、神宮皇學館はまたも母校を余儀なくされます。

母校の存続を憂慮した同窓会「神路会」は神宮に請願し、同四十四年、神社本庁認定の甲種普通神職養成機関として「神宮研修所」が新しく設立されました。ちなみに四年制の皇學館大学は、国内有志の働きかけにより同三十七年に私立大学



風日祈祭に臨時出仕として奉仕する横山さん（後方辛櫃の後ろ側を担ぐ）。

かいます。土日曜は内宮と外宮に分かれての社頭実習で、金曜が休日です。

「神宮二千有余年の歴史の中で、聖上の大御心を体して皇室は元より国家国民の平安を祈る神宮祭祀に、臨時出仕としてご奉仕が叶うということだけでも神宮研修所の学生として籍を置く意義はある」と長内所長は述べます。

青々とした神路島路の山並みを拝し、清らかな五十鈴川のせせらぎに耳を傾けて学業や祭典奉仕、社頭実習に励む日々は、斯界に羽ばたき有為の人材となる上でかけがえのない経験となるでしょう。

**いずれは地元で奉職を**

この春に五名が卒業し、現在は二年生が二名、一年生が一名とやや寂しい状況ですが、少人数ゆえに先輩は後輩に目を



桜木寮での月次祭。祓主（はらいぬし）が、参列する神宮研修所職員をお祓いする。



寮の月次祭でお祓いをする遠藤さん。

向けられる心の余裕も生まれています。午後の授業後、学生三名に志望動機や、将来の進路について話を伺いました。

二年生の菊池勇さん（23）は神奈川県出身。東京の大学を卒業してから伊勢へ来ました。

「警察官をめざしていましたが、在学中に日本文化への関心が高まり、もっと深く知りたいと神宮研修所に入学。将来は地元で奉職したいと考えています」

同じく二年の横山倭さん（20）は山形県の出身です。

「幼い頃から郷土に伝わる獅子舞に親しんできて、中学生のとき神職になることを決意し、高校卒業前に神宮研修所を知って入学しました。ここで学ぶうちに、今までは神職さんの一面しか見ていなかったことを知りました。いずれは地元に戻って神明奉仕するつもりです」

一年生の遠藤恵太さん（18）は唯一、



書道の授業中の菊池さん。

として開学しています。さまざまな変遷を経つつも、神宮研修所はこれまでに約六百名の卒業生を送り出し、それぞれが全国の神社で活躍しています。そして令和三年には創立七十年を迎えるのです。

**神宮神職が教授**

神宮研修所には、神宮禰宜の長内弘昭所長をはじめ四名の職員が勤務するとともに、寮では若手神職二名が寝食をともにしており、昼夜学生の調育指導に当たっています。また寮母的存在として、手作りの食事を用意する調理員一名も勤務しています。

神宮研修所の修業年数は二年間。高等学校を卒業した満二十五歳未満の男子が入学試験を経て、お伊勢さんの近くで修業を始めます。

通常、大学進学には、入学金に授業料、さらに親元を離れるとなると家賃に光熱費などがかかりますが、神宮研修所は入学金・授業料が不要。全寮制ですが寮費や食費等も不要で、授業時の制服や実習被服も神宮から給与されます。最大の利点は、神職をはじめとする神宮の職員から直接学べることでしよう。

研修所での授業は月曜から木曜の週四日。講義時間は大学と同じ九十分です。国史や古事記、神道神学などの座学から、書道や居合道、神社祭式、雅楽などの実践まであり、授業によって一・二年生が合同で受けたリ、学年別に教室で机に向

社家の出身です。

「机に向かうより体を動かすほうが好きで、親の知己の勧めで長野県から来ました。入学してまだ半年ですが、将来は別の神社でご奉仕してから帰郷し、実家の神社を継ぎたいと思っています」

国内には約八万の神社があります。そのすべてに専属の神職がいるわけではなく、地域社会のニーズに応じ切れているとは言えないのが現状です。

神宮のお膝元で学び、やがて各地へ飛び立っていく若人たちに、明るい未来を託したくなりました。



栄養バランスとボリュームを考慮した食事を提供する寮母さん。この日の夕食のメインは焼餃子。



神宮研修所と長内弘昭所長。問い合わせ TEL.0596-22-2912